

保全機能

委員名 國木田 大

名 称	縄文世界遺産の保全機能構築に向けて
目 的	縄文世界遺産の景観保全や環境保全・復元に留意して、保全機能の構築に向けた議論をおこなう。また、地域住民との協働事業やボランティアによる保全活動、環境教育とあわせた保全の取組を目指す。
内 容	<p>○縄文世界遺産の保全に関する項目（※展示、研究機能との連携）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・景観の保全（条例や都市計画） <ul style="list-style-type: none"> →観光や都市開発への事前対応（どの部署が担うのか） →近隣地域が開発された場合：遺産評価（HIA）の検討（※参考文献） →法令の把握（文化財保護法、景観法、建築関係諸規制、環境影響評価など） ・各構成資産周辺域での環境保全および環境復元 <ul style="list-style-type: none"> →研究成果に基づく屋外空間の構築（研究拠点や連携機関でも可能か） →縄文生態系を体感できる場の創出 →屋外空間・展示の持続性 <ul style="list-style-type: none"> （SDGs 的な取組、屋外空間の管理は難しい） ・遺跡の遺構や出土遺物の保存科学 <p>○環境保全に取り組める人材の確保（※研究機能との連携）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境保全や研究を担う専門職を設置する（誰が管理するのか） <p>○教育やボランティア活動による保全（※教育機能との連携）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上記の屋外展示を利用した環境教育とあわせた保全の取組 ・地域住民との協働事業、ボランティア活動の実施
留意点	縄文世界遺産の保全に関する項目の内、特に景観の保全に関する項目は、構成資産を持つ各自治体で個別に判断されることが想定される。そのため、拠点機能では構成資産周辺の屋外展示（体験フィールド）の創出や維持・管理に重点を置く必要がある。ただし、拠点機能（組織・施設）が構成資産と離れた場合は、直接的に現地の環境保全に関与することが難しい可能性もある。遺跡周辺での保全活動は、地域住民と連携して実施し、教育面でも活かすことが重要になる。
参考例文献等	・『世界文化遺産の遺産影響評価にかかる参考指針』文化庁、2019

<p>名 称</p>	<p>世界遺産の OUV の適切な理解に基づく、次のアクションへ繋がる保全機能</p>
<p>目 的</p>	<p>当時の生活像全体の理解とそこから導くべき保全施策の難しさを念頭に、OUV の研究とその教育とを連動させた保全（アクション機能）を実装すること。</p>
<p>内 容</p>	<p>OOUV の理解と保全機能の関係構築（総論） （広義） 明らかになっていること→想像・想起→関連しているであろう周辺環境の保全（アクション）⇒景観保全・HIA（都市計画学）</p> <p>（狭義：ここは専門外のため感想程度） 実験→復元←“研究”することの実感・共有（来訪者） 実験（アクション）→想像・想起→関連しているであろう遺跡保全（アクション） ⇒保存科学（考古学）</p> <p style="text-align: right;">※研究・教育機能と連携</p> <p>○各資産の世界遺産 OUV における位置付け(完全性の根拠)から、保全に係る優位性・優先順位の共有（各論） 「何が重要なのか」の理解が不可欠であるため、OUV 研究と連携した次のアクションへ繋がる保全機能の実装</p> <p>広義の例) 監視のための櫓跡→視点場の設定→眺望景観の保全 良好な生活環境跡→地形・自然環境の理解→植生・水源等の保全</p> <p style="text-align: right;">※研究・教育機能と連携</p>
<p>留意点</p>	<p>具体の HIA・景観保全施策は、各自治体のマネジメントによるため、拠点にあるべき保全機能は2次的にならざるを得ないとする。一方で、開発案件が勃発した際の事後対応ではなく、各遺産の OUV を理解し未然に防ぐ事前措置が構築されることが理想と考えるため、「事前措置構築を目的とした（広義の）保全機能」と位置付けることが現実的ではないかと思う。</p>
<p>参考例 文献等</p>	

名 称	世界遺産教育の推進
目 的	ユネスコの理念及び世界遺産条約の主旨を踏まえ、世界遺産教育を学校教育及び社会教育において推進する。
内 容	<p>1 世界遺産学習推進委員会（仮称）の設置</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発達段階に対応した世界遺産学習の教材やプログラムを作成する。 ・教育委員会による積極的な推進体制を構築する。 <p>2 学校教育における推進 →研究機能、情報発信機能と連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界遺産教育の教員研修プログラムを実施する（道立教育研究所等）。 ・教育旅行における世界遺産訪問を推奨する（旅行業者との連携）。 <p>3 社会教育における推進 →情報発信機能と連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界遺産に関する講演会や市民講座等を開催する。 ・博物館や資料館等との連携により、広範な市民の参加を促す。
留意点	<p>○世界遺産そのものについて学ぶ「世界遺産についての教育」だけではなく、世界遺産を保存・継承する意義や方法を学ぶ「世界遺産のための教育」、及び、世界遺産を切り口として「平和」「環境」「国際理解」等に関わる世界的な諸課題について学ぶ「世界遺産を通しての教育」をも含めてプログラムを作成する必要がある、そのことにより、ユネスコが中心になって推進しているESD（持続可能な開発のための教育）につなげることができる。</p> <p>○ユネスコの提唱する世界遺産教育では「アイデンティティ」「観光」「環境」「平和」がキーワードとしてあげられており、縄文世界遺産を学ぶ際にも視野に入れるといいだろう。</p>
参考例 文献等	<ul style="list-style-type: none"> ・『ESDを視野に入れた世界遺産教育－ユネスコの提起する教育をどう受けとめるか』（2007）田淵五十生、中澤静男、奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要16 ・『世界遺産の普及啓発と教育』（2010）長谷川俊介、国立国会図書館調査及び立法考査局レファレンス2010.5 https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3050268_po_071201.pdf?contentNo=1 ・奈良市世界遺産学習 https://www.city.nara.lg.jp/site/kyouiku/3574.html ・『若者の手にある世界遺産 学び、育み、行動する 教師用世界遺産教材』鹿児島県、2000。（原書名：UNESCO, World Heritage in Young Hands: an educational resource kit for teachers, 1998.） https://whc.unesco.org/uploads/activities/documents/activity-54-5.pdf

<p>名 称</p>	<p>体系化した教育機能（資産（遺跡）⇔「地域遺産」⇔世界遺産の連携）による周辺地域のまちづくりへの展開</p>
<p>目 的</p>	<p>世界遺産・各資産の理解には一定の基礎知識が必要と思われる。よって、必要な教育を体系化し、継続的に推進することで、「地域遺産」としての位置付けも獲得し、目標として周辺地域のまちづくりへ展開することを旨とする。</p>
<p>内 容</p>	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 60%;"> <p>○教育の体系化と各拠点との連動</p> <ul style="list-style-type: none"> 世界遺産に登録されたことを知らない道民が多いと思われる。周知と道民の関心が必要。 ※情報発信機能と連携 教育内容 一般市民を対象にするのか、学校教育に組み入れるのか（例：高校の地理総合）など、対象が多様であるため、例えば「世界遺産として」「構成資産として」別にカリキュラムを作成して必要な教育を体系化し、各拠点における教育機能の分担を行い、総合的教育機能を構築する。 方法論（一般的に以下があるように思うが、方法論と教育内容を整理する。） 展示：全体（世界遺産） 部分（各資産） 体験：見る（収蔵庫）、聞く（公開講座）、作る、食べる 発掘調査へ参加するなど、体験学習の段階設定 研究との連携プロセス案 教育テーマの枠組み（マスタープラン：上位計画）→各拠点がその枠組み内で自由に計画→各拠点のアウトプットの集積（公開講座等）→知見の整理・書籍化等→各資産の地域まちづくり計画・景観計画における「地域遺産」化 ※研究・保全機能と連携 <p>○教育の体系化と「地域遺産」化</p> <p>教育を継続的に推進することで、「地域遺産」としての位置付けも獲得し、周辺地域のまちづくりへ展開させる。地元学校、特に高校の「地理総合」との連携は期待できるのではないか。 ※保全機能と連携</p> </div> <div style="width: 35%; text-align: center;">  <p>3. 北海道・北東北の縄文遺跡群が、昨年世界遺産に登録されました。このことを知っていましたか? 知った 37 知らなかった 9</p> <p>札幌市立大学3年都市計画論受講生46人の回答 (2022.6.8実施)</p> </div> </div>
<p>留意点</p>	<p>・構成資産が広域に分散していることから、拠点配置計画とも連動した教育機能の分配も検討する必要があるのではないか。</p>
<p>参考例 文献等</p>	

名 称	縄文世界遺産の OUV 及び現代的な意義に関する展示
目 的	縄文世界遺産について、母体となるユネスコ及び世界遺産センターの設立趣旨を基にその価値を発信して、現代から未来のより良い国際社会の形成に資するとともに、北海道内の 6 資産と関連資産を中心に世界遺産としてのストーリーを普及する。
内 容	<p>○映像展示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・気候変動による古環境の変化と旧石器時代から縄文時代への移行 ・世界と比較した縄文時代の定住のあり方と精神文化の価値（OUV） ・縄文世界遺産の現代的な意義 <p>○パネル展示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ユネスコと世界遺産条約の役割（世界の世界遺産／文化・自然・複合） ・気候変動と人類の歴史（地球規模&北海道の旧石器からアイヌ文化期） ・縄文時代における「北海道・北東北の縄文遺跡群」、及び各構成資産の役割 ・世界遺産を活用した教育・交流等 <p>○実物展示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・縄文時代、及び各資産を代表する遺物（レプリカ等） <p>○ジオラマ展示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・北海道、及び各資産の立地と当時の環境（生業） <p>○3D&マインズオン展示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視覚的、触覚的な情報から理解する手法等（記録&記憶） <p>○企画展示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他資産を紹介し誘導を図る展示、及び OUV を深める研究成果の展示 <p>○フィールド展示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・屋外での体験・観察活動を展開（ハンズオン&マインズオン含む）
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・ヘリテージツーリズムやアドベンチャートラベルの導入となる工夫が必要。 ・道南6資産と関連資産の他、全ての資産への誘導を図るための工夫が必要。 ・各種講座やフォーラムのためのスペースについては教育機能等と連携。
参考例文献等	<ul style="list-style-type: none"> ・ふじのくに地球環境史ミュージアム（静岡県）

名 称	縄文世界遺産に関わる情報発信機能（研究&観光）について
目 的	国内・外に北海道の縄文世界遺産の文化的価値を発信し、地域に交流と賑わいを創出する。
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一般的な観光を目的とする層（観光客）に対する情報発信 <ul style="list-style-type: none"> ・ 元々関心のあるコア層に対しては専門的なアプローチを別に検討。 ・ 知的好奇心の旺盛な層や、一般観光施設として認識している層 ・ 北海道が選ばれる理由（北海道観光の強み）：自然、食、温泉を目的とする層が大多数。特にファーストビジターは人気ある有名な観光地・観光施設に足を運ぶ。 ・ 自然、異文化を生かした豊富な体験メニュー（AT）、多様で豊かな歴史文化（縄文、アイヌ）も注目度は高いが、主要な目的地にはなりえていない。 ・ 観光客が観光地を選択する目線：シンプルに観て、聞いて、面白い、楽しい、美しい、興味深い、記憶に残る、印象が強い、話題性がある、体験できて楽しいなどの単純要素を重視。 ○ 縄文遺跡の何を伝えるか？（観光客に対して） <ul style="list-style-type: none"> ・ 観光客にとって縄文遺跡の何が響くのか？という観点。 ・ 「感動や感銘を伴うストーリー」がポイント。 ・ 一言でいうと、「自然環境に育まれた平和な精神文化」 ・ どのようにして分かりやすくブレイクダウンして伝えるか？ ○ 訪問先として選ばれるには？ <ul style="list-style-type: none"> ・ 絶え間ないプロモーション、興味・関心が高い状態を作り出す。 ・ メディア、SNS、Twitter、Instagram、YouTube、Tiktok,など幅広く。 ・ TVCM、新聞、雑誌、書籍など旧来の媒体も活用。 ・ 実際に訪れた人の記憶に残るような経験価値を提供。 ・ ビジュアル的なインパクトは望めないなので、見せ方の工夫を。 ・ VRなどで過去の生活の様子をうかがい知ることができる見せ方。 ・ ガイドのクオリティー ・ 説明を補助するツール（インバウンド、外国語対応も含めて）。 ・ 縄文遺跡をより深く知ることができるような参加型体験コンテンツの開発。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 縄文世界遺産の価値（一般的な観光客にとって）を伝える。 ・ 弥生文化（生産経済）に変遷しなかったわけ ・ 恵まれた自然環境と平和な精神文化 ・ アイヌ文化へのつながり
参考例 文献等	

名 称	縄文世界遺産に関わる誘客機能（存続可能な観光）について
目 的	国内・外に北海道の縄文世界遺産の文化的価値を発信し、存続可能な観光を実現し、地域に交流と賑わいを創出する。
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 現状分析（マーケティング）基本方針、戦略の策定 <ul style="list-style-type: none"> ・ 蓄積すべきデータ項目を設定し、現状把握のための様々なデータを集約、共有するとともに、縄文核施設を横断的にマネジメントできる体制を整える。 ・ 目標設定「存続可能な観光」に必要な具体数値を明確化。 ・ ターゲット、安定的需要の維持、新規需要拡大、それぞれのアプローチ戦術を策定する。EX、小学校・中学校・高校などの学生から派生する学校行事、旅行会社の募集型企画旅行、OTA、団体、個人需要などの形態ごと。 取組すべき優先順位、進捗状況の確認、不足があれば、新たな取組事項を追加。 ○ プロモーション（誘客） <ul style="list-style-type: none"> ・ 縄文遺跡施設全体的なプロモートと、地域ごとの役割分担 ・ 縄文の魅力、全体的なブランド展開、メディア、Facebook、Twitter、Instagram、YouTube、Tiktok,などのSNSの他TV、新聞、雑誌、書籍など多くの媒体を活用。 ・ 当該地域を面でPRするためのプロモーション 地域の観光関連業者（地域への集客を目的とする企業、団体、自治体や交通事業者、宿泊、入場施設、レストラン、立ち寄り施設等）と連携。 EX 旅行会社との商談会参加、修学旅行誘致のための教育旅行関係者との懇談会など一同に会した場でのPR、商談が可能。 ○ ツール <ul style="list-style-type: none"> ・ BtoB、BtoCなど用途・目的に合わせたツール制作 ・ 縄文全体PR動画、画像、パンフレット、書籍、個別施設ごとのPR素材 ・ 旅行会社のパンフレットや、OTAのWEBサイト用に、著作権フリーまたは、著作権使用許諾にて2次利用できる画像、動画データなどを準備。 ・ 活用されやすい元データであることがポイント
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・ マーケティング、ブランディングを推進する体制を一元化 ・ 「存続可能な観光」の意味合いや、誘客機能との関係性を明確化することが必要。
参考例 文献等	

名 称	世界遺産を通した文化交流の推進
目 的	世界遺産を通した文化交流により、世界遺産の普遍的価値及び文化の多様性を学び、ユネスコの理念である「平和の文化」を築く。
内 容	<ol style="list-style-type: none">国内の世界遺産サイトとの文化交流<ul style="list-style-type: none">・縄文世界遺産を通して学んだことを発信するとともに、国内の他の世界遺産サイトで実施されている世界遺産学習を知ることにより、世界遺産の普遍的価値について理解を深める。外国の世界遺産サイトとの文化交流<ul style="list-style-type: none">・海外の日本人学校等との連携により、外国の世界遺産について身近に学び、文化の多様性について理解を深める。
留意点	・世界遺産の画像などをふんだんに活用するとともに、オンラインで遠隔地との文化交流を実施する。
参考例 文献等	・第12回世界遺産学習全国サミット in 屋久島 2022.2 http://www.town.yakushima.kagoshima.jp/topics/43370/

名 称	資産の保全・普及、及び縄文世界遺産の OUV に関する研究
目 的	埋蔵文化財という脆弱な特徴を有する資産の保全とその価値を効果的に伝える人材育成のための手法に対する研究を進めるとともに、科学的な根拠に基づいた更なるアウトプットを広めるための縄文世界遺産の OUV に関する研究を推進する。
内 容	<p>○保護・保全に関する研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資産に関する保存科学的な調査・研究 ・地域住民等と協働で進める事業等の研究（遺跡学の観点） <p style="text-align: right;">* 教育機能と連携</p> <p>○インタープリテーションに関する研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ガイディング等を通じて価値やその意義を伝えるための研究 ・縄文世界遺産の価値を現代社会へ還元するための調査・研究 <p style="text-align: right;">* 教育機能・情報発信機能と連携</p> <p>○縄文世界遺産の OUV に関する研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・構成資産の範囲における花粉化石等の調査による古環境研究（気候変動） ・上記調査に基づく各構成資産の古植生や古地形の復元研究 ・OUV に該当する各資産の時期に関する高精度の年代測定 ・各資産から出土した土器付着炭化物の分析等による食性研究 ・定住の開始から成熟に至る精神文化の変遷に関する研究 ・各資産の発掘調査報告書等既存データの収集・整理 <p style="text-align: right;">* 上記に関連する調査・研究</p>
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・保護・保全については、道埋蔵文化財センター等専門機関と連携する。 ・インタープリテーションや OUV に関する研究については、存続可能な社会への提言に結びつく学際的な研究を基本とする。 ・構成資産全体については、4 道県事務局マターの研究テーマとする。
参考例文献等	<ul style="list-style-type: none"> ・羽生淳子／小規模経済プロジェクト /総合地球環境学研究所 http://www.chikyu.ac.jp/fooddiversity/index.html ・吉田明弘 他 「北海道南部万畳敷湿原の花粉分析から見た完新世の植生変遷」『植生史研究』第 28 巻第 1 号 2019 ・阿部千春 中村大「島嶼環境における先史狩猟採集民の定住戦略－北海道島及び本州島北部の縄文文化から－」『月刊地球 島嶼文明の環境史研究－日本における現状と課題』482 号 2019 ・村本周三 他「渡島半島南東部における縄文時代後期後半の古食性」『日本考古学協会第 87 回総会研究発表要旨』 2022

名 称	縄文世界遺産に関する研究推進策
目 的	縄文世界遺産に関する研究テーマを設定し、その研究成果を発信できる人材確保、研究助成の枠組みを構築するなどの研究推進策を講じる。また、研究成果に基づいた環境復元や保全を、構成資産や研究拠点でおこない、教育・展示面でも活かす。
内 容	<p>○縄文世界遺産に関する研究テーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・気候変動などに伴う環境変化に関する研究（どのような環境変化） ・縄文時代における文化集団の環境適応戦略（どのように適応） ・縄文時代の社会および精神文化の復元（どのような価値観） ・構成資産に関わる地域的な研究（なぜ北海道・北東北なのか） ・縄文文化と海外の先史文化との比較（国際的な位置づけ） ・縄文世界遺産を主とした保存と活用（どのように役立てるか） ・環境保全に関する研究（現代社会での環境問題との関連） <p>○縄文世界遺産に関する研究推進策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上記のテーマに関連した研究シンポジウムの開催（国内外） ・国際的な研究発信や研究シンポジウムの企画をおこなう人材雇用 ・環境保全に取り組める学芸員雇用（※保全機能との連携） ・研究助成金の創設および科学研究費との連携 <p>○研究成果に基づいた環境復元および整備（※教育・展示機能との連携）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各構成資産もしくは研究拠点での環境復元（縄文植物園的なもの） ・各研究機関との連携（北海道博物館、ウポポイ、北海道大学など）
留意点	<p>・縄文世界遺産のOUVに関する中心的な研究テーマは、縄文時代にどのような環境変化や適応戦略があったのかを解明することであり、その研究成果をどのように現代社会の環境保全や教育に活かしていくのかが課題となる。また、縄文世界遺産の研究を国際的に発信するためには、専門職の人材確保が必要不可欠であるため、どのような体制でおこなうのか議論が必要となる。</p>
参考例文献等	<ul style="list-style-type: none"> ・根岸洋 『縄文と世界遺産—人類史における普遍的価値を問う』筑摩書房、2022 ・水ノ江和同 『実践 埋蔵文化財と考古学—発掘調査から考える—』同成社、2021